

古書のたのしみ（令和八年一月）

土屋 博

一「日本婦女用文」佐佐木信綱著

（博文館、明治三十年九版、改定正價金拾八錢、三一〇頁）

古書價格三百圓也。初版は明治廿三年。婦女向けの文語教科書として最適の一冊かも知れず。新年の文より、「年のはじめの御ことほぎ千代もかはらぬためしにまだまだ霞まぬ空ながら何となう長閑におぼえ候。打揃ひ給ひ屠蘇白散（びやくさん）御齒固のもちひなど祝ひたまふらんといと嬉しうこそ思ひやり侍れ。こなたいづれもたひらかに打つどひ年を重ね候へば御心安く思し召下され度候」と。

本書後半には女子消息文沿革、及び消息類聚として宇津保物語、源氏物語などの手紙文例を示す。

冒頭には小松宮御息所勲一等頼子殿下、伏見宮御息所勲一等利子女王殿下の寫眞あり。著者佐佐木信綱（一八七二年生れ、一九六三年歿）は、東京大學文學部古典講習科卒。昭和十二年文化勲章受章者。（父の佐佐木弘綱は帝國大學文科大学古典講習科創設時の教授なり。）



一 年 八錢、女向け千代もかはらぬためしにまだまだ霞まぬ空ながら何となう長閑におぼえ候。打揃ひ給ひ屠蘇白散（びやくさん）御齒固のもちひなど祝ひたまふらんといと嬉しうこそ思ひやり侍れ。こなたいづれもたひらかに打つどひ年を重ね候へば御心安く思し召下され度候」と。
二「豪傑の遺訓」松風軒主人著 見宮御三年歿 帝國大學文科大学古典講習科創設時の教授なり。
三 五錢、

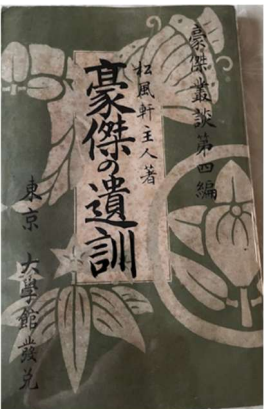
（大學館發兌、明治卅三年刊、正價二十五錢、一八二頁）

古書價格三百圓也。叙言に曰く、「大楠公、豐太閤、東照公の偉略壯圖は言ふを俟たず、信玄、謙信、清正等が英邁勇猛の事蹟に至ても世人の普く知る所なり。然れども是れ唯其行蹟のみ。未だ形而上の思想を窺ふ能はざるの憾あり。・・・思想は言に現じ行に影ず。請ふ其言を味ふて其美を謳はん」と。目次は、北條時頼、楠正成より始まり、松平定信、徳川齋昭に終る。合計三十名。

徳川齋昭の四思とは、「一 飯を得るごとに兵糧の粗々敷を思ひ、一 衣を製するに甲冑の窮屈を思ひ、一 居宅を備ふるに陣中の不自由を思ひ、一 起居のやすきに山野のくるしみ

を思ひ」。

松風軒主人こと、岩井政次郎には、長恨歌評釋、小野小町、情の清盛、席上討論演說模範などの著作あり。



三「偉人斷片」小谷保太郎編輯

(吉川弘文館、明治三十六年刊、定價金拾五錢、一五八頁)

古書價格三百圓也。

「甲東の三返事」には、「大久保利通に親炙しし人は能く知る所なるが、其政道に關し諸官人等意見を演べて之を大久保に諮るに、利通は必らず『承知致しました』、『御評議になりませう』、『ソレはいケマセン』の三答中の一に出でざるはなかりしなり」とあり。

小谷保太郎には、子規言行錄、子規隨筆、青木繁畫集、賴山陽の家庭、などの編著書あり。

2

四「人情觀的 日本史」伊藤銀月著

(文祿堂藏版、明治三十七年刊、定價五拾錢、本文二二頁)

古書價格三百三十圓也。

黒岩淚香、序文に曰く、「悲願の本家は佛教なり。……余は斷言す。日本は樂觀の國なり。日本には眞成の悲觀無しと。……我が日本は人情の美を以て世界を將ゆ可き天職を有するには非ざるか。」と。

伊藤銀月(一八七一年生れ、一九四四年歿)は、秋田中學中退、萬朝報記者。銀月には、忍術極意秘傳書、男女觀、美酒美女、新水滸傳、日本警語史などの著作あり。

五「日本文學史辭典」文學博士上田萬年閱、文學士佐々政一、同山内素行共編

(金港堂書籍、明治三十九年刊、定價金八拾錢、本文二四六頁)

古書價格三百圓也。「伊呂波歌」については、「空海弘法大師の作なりといひ傳へられ、涅槃教中の『諸行無常。是生滅法。生滅々已(しょうめつめつゐ)。寂滅爲樂。』の四句を取り來れるものなりといふ」と。

金港堂書店は、國語教科書の出版にて名高く、國語勉強者にとりて便利なる一冊なりしこと、疑ひ無し。

六「四十七士」 大町桂月著

（弘學館、明治四十三年刊、正價金壹圓、二九一頁）

古書價格四百圓也。大町桂月曰く、「東京にて最も參詣者の多き處はと問はば何人も必ず淺草觀音と答ふるなるべく、その次ぎはと問はば何人も必ず泉岳寺と答ふるなるべく。……泉岳寺の參詣者は祈願と見物を離れて全く四十七士の徳を慕ふものなり。……余は斷言す。四十七士の墓畔に香烟の絶えざる間は、日本の國運益々隆昌なるべき也」と。

大町桂月（一八六九年生れ、一九二五年歿）は、東京帝大國文科卒、博文館入社。美文家として名高く、文語文を書く際の手本とすべし。

七「萬葉集新釋」 奈良女子高等師範學校講師豐田八十代著

（廣文堂書店、大正八年刊、定價金貳圓八拾錢、本文三四〇頁）

古書價格千圓也。和綴、帙入。



序に曰く、「萬葉歌人の多くは奈良の地にありて實感實景を歌へるにかゝはらず、研究者は

遠隔の地にありて研究に従事せるが爲に、その説くところいづれも隔靴搔痒の感あるを免れず。幸ひに余は職をこの地に奉じ日夕奈良の風光に親しみ普く畿内の山川を跋涉して實地に考証を重ね、更に紀伊筑前越中石見等の地を歴訪して歌人の遺蹟を搜り、聊か得るところあり」と。凡例によらば、「本書は萬葉集中にて殊に世人に尊重せられたる一、二卷の全部と三卷以下の佳作とを採八「作者別 名歌集成 附和歌小史」齋藤清衛編

(中文館書店、昭和十三年刊、定價金貳圓、本文二九八頁)

古書價格千二百圓也。函入。初版は昭和五年。

第一期上世時代(發生興隆期)。(額田女王より笠女郎まで。)

第二期中世時代(完成爛熟期)。(前期完成時代、在原業平より平兼盛まで。中期爛熟期、和泉式部より建禮門院右京太夫まで。後期衰頹期、伏見天皇より細川幽齋まで。)

第三期近世時代(古調復興期)。(復興啓明時代の人々、下河邊長流より荷田春滿まで。上世歌調憧憬の人々、賀茂眞淵より鹿持雅澄まで。新古今調の人々、加藤枝直より本居大平まで。古今調の人々、小澤蘆庵より八田知紀まで。幕末自由詠出の人々、良寛より神山魚貫まで。)

第四期現代(自覺再生期)。(浪漫派、落合直文より吉井勇まで。自然派、尾上柴舟より土岐哀果まで。寫實派、正岡子規より古泉千樫まで。その他、明治天皇より西村陽吉まで。)

九「精神興揚 國民百人一首」白沙村人編

(京都市淨土寺町橋本關雪發行、昭和十三年刊、非賣品、三四頁)

古書價格三百三十圓也。二度目の購入なり。

編者序文に曰く、「ある雜誌社で社員を募集するに際し、薩長以外の勤王家十名の名前をあげるやう問題を出したら、一人も満足に答へるものは無かつたと記してある記事に刺激を受け、再び舊稿を出し、訂正補足の上、とにかく印刷することとした。」と。

十「和歌讀本」田中耕耘著

(玉川學園出版部、昭和十四年刊、定價貳圓四拾錢、四六〇頁)

古書價格二百圓也。凡例によらば、上は神代より下は昭和の今日に到る各時代の主なる歌人の代表的和歌を作者別に選擇したるものなり。收録の和歌は八百餘首、作者は二百五十人。選出の標準は、所謂人口に膾炙せられたるものといふ點に重きを置けり。

十一「頭注 平家物語鈔 全」鈴木敏也編

(立川書店、昭和十四年刊、定價金四拾錢、九八頁)

古書價格百拾圓也。和綴。文部省檢定濟高等女學校國語科用教科書なり。

古書の所有者は栃木高女の學生。鉛筆の書き込み多し。

十二「徒然草諸注集成」田邊爵著

（右文書院、昭和四十四年再版、定價二千五百圓、七九二頁）

古書價格五百圓也。田邊爵（一九〇二年生れ、一九九〇年歿）は、愛知縣出身、昭和四年に高等教員資格取得。

十三「百人一首 小倉山莊色紙之和歌」佐佐木忠慧編

（櫻楓社、昭和四十八年刊、定價千二百圓、一〇五頁）

古書價格百圓也。從來世に知られざる九條家舊藏本二種類を複製したるものなり。一本は仁和寺守理法親王の御筆、他の一本は、後西院女一宮誠子親王御筆になるものなり。崩し字の勉強に適す。

十四「書で愉しむ論語」醫學博士本吉光隆、書家幕田魁心共著

（木耳社、二〇〇二年刊、定價本體千八百圓＋税、一五六頁）

古書價格五百圓也。本吉光隆（一九四〇年生れ）は東京慈恵醫大卒、上總記念病院理事長兼院長。幕田魁心は大東文化大學卒の書家、公立高校教師。本吉氏の木更津ロータリークラブ會長時代に毎週勉強材料として提供したるもの、本書の土臺となれり。眺むるに、なかなかの名著と覺ゆ。「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」（人生の目的は道を聞いてこれを體得し實現することを以て終りとしたい）は、孔子の最も偉大なる言葉の一つなりとす。



十五「やまとうた一千年 古今集から新古今集の名筆をたどる」

（五島美術館大東急記念文庫、二〇〇五年刊、二五五頁）

古書價格千五百圓也。二〇〇五年に開催せられたる展覽會の圖録なり。（古今集編纂千百年、新古今集成立八百年記念。）

古今集現存最古の高野切（こうやぎれ。紀貫之筆）など。また、新古今集については、水無瀬切（傳後鳥羽天皇筆）、隱岐本（配流後に四百首を削除し千六百首に精選したるもの）など。

（令和八年二月十五日受附）